

松本市文化財調査報告 No.110

TAKATSUNA-CHŪGAKKŌ

松本市高綱中学校遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

—緊急発掘調査報告書—

1993・3

松本市教育委員会

松本市高綱中学校遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

—緊急発掘調査報告書—

1993・3

松本市教育委員会

序

松本市西部に位置する島立地区は、長野自動車道建設、ほ場整備など開発に伴う発掘調査が数次にわたって行なわれております。高綱中学校でも校庭拡張、校舎増築の際、奈良から平安時代の遺跡を調査しました。このたび同校の柔剣道場を増設するにあたり、市教育委員会で第IV次発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図りました。

今回の発掘調査は、市教育委員会の委託を受けた財団法人松本市教育文化振興財団によって組織された調査団が、平成4年8月に行ないました。作業は夏の猛暑の中でしたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了いたしました。その結果、平安時代の遺物を得、これまでと同じ時代の遺跡が広がっていることが確認されております。

本書には過去に行なわれた発掘調査の成果も合わせて収録しました。数次にわたる調査も一応の決着を見ることとなりました。当地周辺の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

1. 本書は、昭和60年、平成元年、同4年に実施した。松本市島立に所在する高綱中学校遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は、松本市立高綱中学校施設改築・拡充に伴うもので、松本市教育委員会（Ⅱ・Ⅲ次）、松本市立考古博物館（Ⅳ次）が調査を実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅲ-3を竹内端長（土器、陶磁器）・三村竜一（瓦塔）、それ以外のものについては高桑俊雄が行なった。
4. 本書作成に関しての作業分担は、次の通りである。

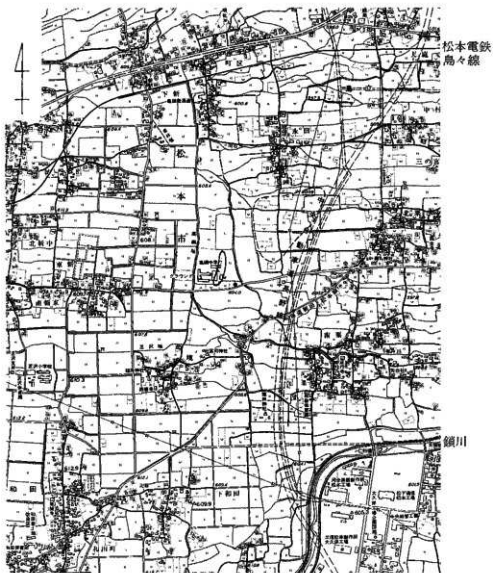
遺構図整理、トレース	—————	上条尚美・村山牧枝
遺物整理、復元	—————	倉科祥恵・堤加代子・高山一恵
遺物実測、トレース	—————	竹原久子・松尾明恵
編 集	—————	事務局
5. 本調査にあたって次の方々より御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。
高綱中学校、長野県埋蔵文化財センター北栗地区調査員の方々、島立地区公民館
6. 本調査での出土遺物、測量図類等は、松本市立考古博物館が保管している。
7. 遺構番号は1984（昭和59）年のⅠ次に次ぐ調査である為、住居址は1号、竪穴状遺構は2号より、ピットは58からとして、Ⅲ次、Ⅳ次と順次命名している。
8. 図版について一部欠落しているものがあるが、図をもって御了解を頂きたい。

目 次

I 調査経過	
1. 調査に至る経過	3
2. 調査体制	3
3. 調査日誌	4
II 遺跡の環境	
1. 調査地の位置	9
2. 地形と地質	9
III 調査結果	
1. 調査の概要	13
2. 遺構	14
3. 遺物	22
IV まとめ	27

図 目 次

第1図 調査地の位置	2
第2図 調査地の範囲	5
第3図 土層概略図	8
第4図 遺構配置図1 (II次-A調査区)	10
第5図 遺構配置図2 (III次調査区)	11
第6図 遺構配置図3 (IV次調査区)	12
第7図 第1号住居址	15
第8図 第2号住居址	16
第9図 第3・4号住居址	17
第10図 竪穴状遺構・土坑	19
第11図 土坑・ピット	21
第12図 出土土器実測図(1)	24
第13図 出土土器実測図(2)	25
第14図 瓦塔	26



○ 今回報告 (第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査) 地

● 第Ⅰ次調査地 (報告済)

○ (●) 「島立桑里的遺構」調査地 (報告済)



第1図 調査地の位置

I 調査経過

< 1 調査に至る経過 >

本調査は当初、高綱中学校グラウンドの拡張及び園芸用地取得に伴うものであった。昭和59年担当課より計画が示され、これ以後平成元年、更に平成4年に特別教室棟等の増築に関連しての事業が加わる。一帯は新村・島立条里的遺構として、また高綱中学校遺跡として二重のネットがかけられている場所であり、協議の結果、文化財保護法に基づき当教育委員会（平成4年より勤松本市教育文化振興財団、松本市立考古博物館）が調査を担当することとしたものである。

< 2 調査体制 >

昭和60年度

調査団長：中島俊彦（松本市教育長）

現場担当者：高桑俊雄、竹原 学

発掘作業員：大出六郎、瀬川長広、滝沢智恵子、鶴川 登、中島新嗣、山下泰永、向山かほる
三沢元太郎、三村竜一

平成元年度

調査団長：松村好雄（松本市教育長）

現場担当者：高桑俊雄

発掘作業員：北野よ志子、田多井 亘、塚田文子、藤森久子、丸山恵子、百瀬義友

平成4年度

調査団長：守屋立秋（松本市教育長）

現場担当者：高桑俊雄、三村竜一、市川 温

発掘作業員：大久保榛子、衆井まさ、衆井益子、鈴木なつ江、田多井 亘、中島治香
藤森寿々子、藤森久子、百瀬維代、百瀬二三子、百瀬義友、吉江和美、米山禎典

< 3 調査日誌 >

第Ⅱ次調査

- 1985年4月30日(伏晴) 午前中、発掘用資材を搬入する。午後、高槻中学校で生徒に発掘調査の説明会を行なう。
- 5月1日(休晴) 今日より重機入る。プール北側水田をA調査区とし表土削平を開始する。午後より中学校生徒有志が発掘体験をする。
- 5月2日(休晴) 重機作業継続。A調査区とグランドフェンス東側(B調査区)を削平する。午後、中学校生徒有志が入る。A調査区の竪穴状遺構、土坑、ピットを検出する。
- 5月4日(出晴) A調査区全体図作成。竪穴状遺構、土坑等の半制作業。第2号竪穴状遺構(以下竪○とする)と第1号土坑の土層図、平面図を作成。
- 5月7日(伏雨)の為中止
- 5月8日(伏曇) A調査区にて住居址2軒を検出、1・2号とする。A調査区周囲の土層既図を作成。今回より学級毎の体験学習を行なう。1の1、1の3(以下クラス名のみ記載)
- 5月9日(休晴) 第1・2号住居址(以下○住と記載)掘り込み作業を開始する。B調査区検出作業を行なう。長野県埋蔵文化財センター(以下県埋文センターと記載)調査研究員、県教委小林指導主事来訪。1の2、2の2、2の3、2の4、3の5
- 5月10日(陰晴)のち曇 1・2住掘り込み作業を継続。1の4、1の5、2の1、3の4
- 5月11日(出曇) 1・2住掘り込み作業を継続。3の3
- 5月13日(阴曇) 1・2住掘り込み作業を継続。県埋文センター調査研究員見学。信濃史学会・小穴芳実氏来訪。2の4、3の5
- 5月14日(伏雨)の為中止
- 5月15日(休晴) 1・2住両方とも部分的に床面まで検出する。B調査区で竪3、ピットを検出。石組みを確認。2の1、2の2、3の1、3の2(以上で中学生体験学習を終了する)
- 5月16日(休晴) 1・2住土層図作成。土層観察用ベルトを除去。県埋文センター調査研究員、地元公民館長、地元史談会員等見学。
- 5月17日(陰晴) 1・2住の清掃・写真撮影を行ない、2住を精査。竪3を掘り始め、石組みにトレンチを入れる。
- 5月18日(出晴) 1住カマド半掘。竪3掘り上げ、土層図及び平面図を作成。石組みを拡張

し観察する。B調査区ビット掘り上げ。

5月20日(雨)雨の為中止

5月21日(曇) 1住カマド平・断面図を作成する。石組みの平面図を作成。B調査区全体測量を行なう。

5月22日(晴) 笠3、石組みの写真撮影を行なう。B調査区南北端の土層概図を作成。(尚、石組みは報告で4号住居址として扱う事とする)

第Ⅲ次調査

1989年7月21日(曇) 現地にて学校教育課と打合せ。

7月24日(晴) 重機で削平作業より開始する。一部にはアスファルトの舗装がある。

7月25日(晴)一時雨 引き続き重機にて検出作業を行なうが、埋設物も多く攪乱範囲は広い。

7月26日(曇)のち雨 実質調査範囲は狭く、検出面は地表から深いので土置き場に苦勞する。

7月27日(曇)一時雨 住居址検出、第3号住居址とし、掘り込みを開始する。

7月28日(晴) 3住掘り込み継続、床面を確認した。カマドも一部を検出した。

7月31日(曇)一時雨 3住平・断面図を作成。写真撮影を行なう。全体測量を実施、遺物を取り上げる。

8月1日(雨)雨の為中止

8月2日(曇)一時雨 重機にて埋め戻し、今回の作業を終了する。

第Ⅳ次調査

1992年8月18日(晴) 朝より重機(バックホウ)を搬入し、午後よりブルドーザーも加える。発掘資材を搬入する。

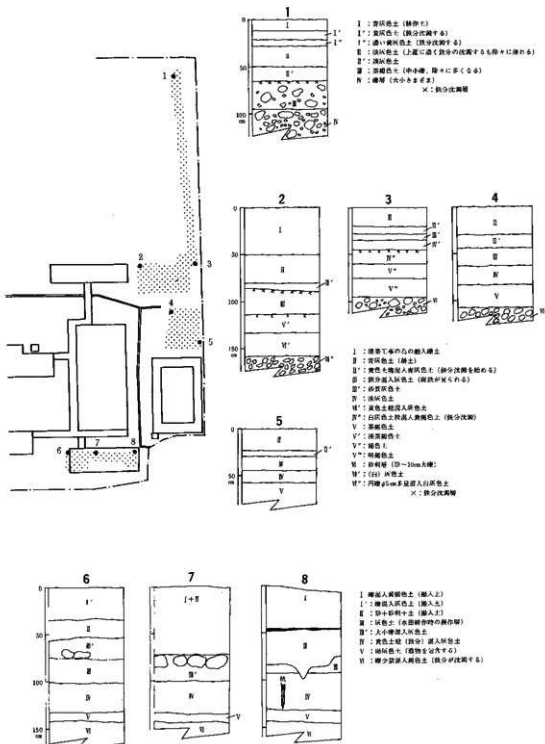
8月19日(曇) 重機にて第1検出面まで下げる。ビット認められるが不明瞭な為、遺物取り上げのみで、重機にて更に掘り下げる。

8月20日(晴) 平板測量実施。ビットを検出、掘り込みを行なう。全体図作成。第1号溝にトレンチを入れる。

8月24日(曇)時々雨 再度、重機による削平を行なうが、20cmも下げると砂利や円礫が露出(南側)する。第2・3号土坑の平・断面図を作成。写真撮影を行なう。

8月25日(晴) テントを撤収し、発掘資材を搬出する。

8月26日(晴) 重機で埋め戻し、作業を終了する。以後、和田にて遺物及び事務整理作業に取りかかる。



第3図 土層概略図

II 遺跡の環境

< 1 調査地の位置 >

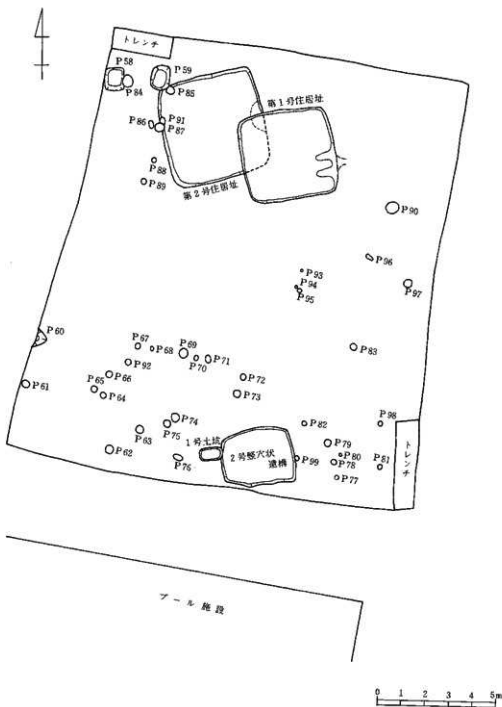
調査地は松本市大字島立4416-1番地、東経137度55分44.6秒、北緯36度12分49.2秒に所在する。遺跡の地名となる高綱中学校の高綱とはこの地「高綱原」の地名である。この『高綱』とは平安時代末期の源頼朝に仕えた近江出身の武士佐々木四郎高綱が剃髪して、諸国行脚の後この地に庵を作り、一生を終わったとの由來から来ているとされている。

この一帯は古代より開田された桑里的遺構とされている。近年は場整備事業が終了し、周囲は一面の水田地帯となっている。学校西隣には整備された高綱堰が南へ流れ、南側には市道高綱線が東西に通過している。また東400mの所には南北に中央道長野線が開通し、西には水田を隔て新村の新興集落が増加しつつある。今次の調査地は前回の第I次調査地とは異なり、すべて現中学校敷地内である。プールの北側をII次-A調査区とし、グラウンド東部にII次-B調査区、室内運動場（体育館）南をIII次調査区、II次-A調査区の北側はIV次調査区として実施した。

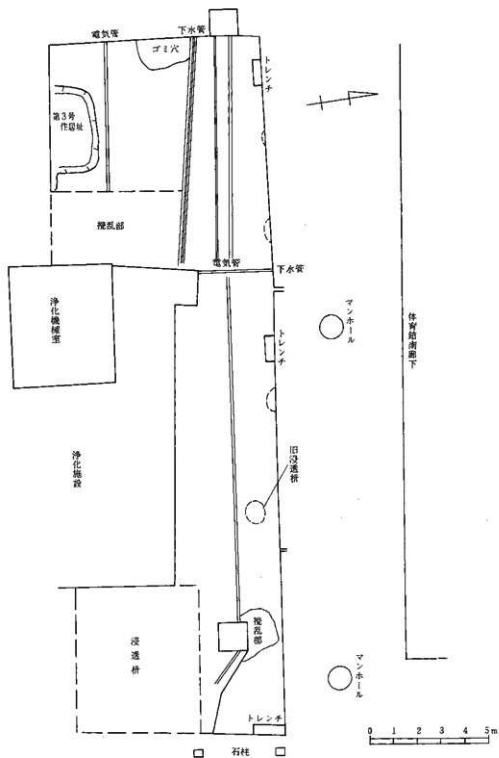
< 2 地形と地質 >

本遺跡は（海拔604～605m、傾斜8/1000SE）平坦地にのり、地形上は広大な梓川扇状地の末端に近く、扇状地性の沖積面上に位置する。梓川は右岸に四段の段丘面をもち、この面を上より波田面・森口面・上海渡面・押出面と呼んでいる。波田面・森口面はロームに覆われていて、それぞれ洪積世後期中頃・後期末に形成されている。上海渡面・押出面は沖積世に属するもので本遺跡は最も低位の押出面に続く沖積面になっている。地下構造は基盤岩類の上に氾濫原堆積物として、波田砂礫層、森口礫層、沖積層がのっていると考えられる。遺跡と直接関係を持つのは、沖積層の氾濫原堆積物である。これらは上層・砂層・礫層あるいはこれらの混成層などさまざまであるが、何れも梓川水系堆積物である。

今回の調査地を微視的に見ると、II次-A調査区は表土以下検出面まで水田耕作による土壌の特色を見せ、地表下50～60cmで茶褐色の検出面となり（5地点）、それを突き抜くと砂質の強い褐色土、そして110cm程できれいな小礫層に達する（4地点）。この様子は隣のIV次調査区の上層搬入土をのぞいた下部でも同様である（2地点）。II次-B調査区は4号カマドを境に南側は上と同様であるが、北へ行く程耕土が浅くなり、北端では地表下65cmで小礫層になってしまう（1地点）。梓川に近い所ほど氾濫原堆積物の影響が強くなる。III次調査地では全体に70～80cm程上部が盛土されて、その下に水田耕作の様子を残して8地点には木杭も残っていた。1～5地点より全体的に黒い土色で礫層までは確認し得なかったが、前者よりは耕土が厚いものと思われる。

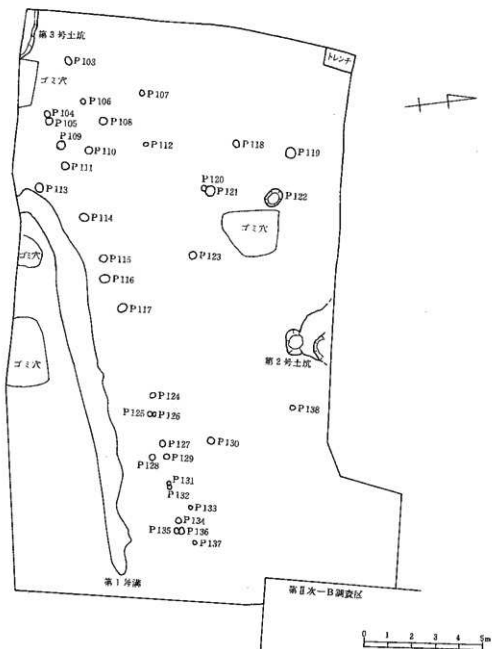


第4図 遺構配置図(1) 第Ⅱ次-A調査区



第5図 遺構配置図(2) 第Ⅱ次調査区

特別設置機 (視聴装置)



第6図 遺構配置図(3) 第Ⅳ次調査区

III 調査結果

< 1 調査の概要 >

1 第II次調査

A・B調査区がある。実質調査は1985（昭和60）年4月30日～5月22日の15日間にわたり実施した。中学校の社会科学習の希望もあり、延べ18クラスの生徒が発掘を体験した。まず、A調査区はプール北側で東西約16m、南北18.5m、実質調査面積299.5㎡である。ここは水田として利用されており、学校用地に転換するところである。調査成果としては、古墳時代末期、平安時代中期の住居址各1軒、それに土坑、竪穴状遺構が各1、ピットが計42個である。

B調査区はグラウンド東側の水田で、これをグラウンドに組み入れる為、東西約3m、南北85mの南北に長い用地、実質調査は254.4㎡である。ここでは南側で竪穴状遺構1、ピット3個、そして中央部に住居址のカマド煙道と見られる配石を認めた。しかしこのカマドを境に北側には遺構は検出できなかった。

2 第III次調査区

第III次調査区は室内運動場（体育館）南側で、特別教室棟（新技術家庭科棟）建設の為に選定された所である。調査は1989（平成元）年7月21日～8月2日の7日間実施した。ここは約300㎡の予定地のうち浄化施設、電気用の施設やこれらに伴う工事等の擾乱が入り、ほんの僅かしか安定面が得られなかった。遺構は平安時代後期の住居址1軒を用地南西隅に検出したのみで、土坑・ピット等は確認できなかった。

3 第IV次調査区

柔剣道場建設の為に用意されたグラウンド南西部の用地であるが、ここは以前、急造の旧技術家庭科棟が建てられていた場所である。1992（平成2）年8月18日～8月26日の5日間で約349㎡を調査した。北東部はII次-B調査区と重複する。この用地内には深いゴミ穴がいくつもあけられていた。成果としては、覆土に焼土塊を含む土坑2、ピット36個、溝1本を検出した。これらの遺構は時期を示すような遺物はもたないが、検出面からの僅かの土器類は平安時代中期頃の様相を見せている。

< 2 遺構 >

1. 住居址

第1号住居址

本址は第II次-A調査区中央やや北寄りにある。主軸はN-82°-Eをとり、規模は東西、南北とも3.85m、端正な隅丸方形を呈している。本址に先行する2号住居址の隅を小さく破壊して作られており、検出面は茶褐色土で覆土は2号住居址よりも灰（白）色が強く、比較的容易にプランを確認することができた。

壁高は北側で25cm、西側では30cmを測る。床面は砂礫土上の茶褐色土で直径1～5cm大の小礫が少し見えている。生活面である床面に硬さは感じられず、少し掘りすぎて断面で確認した所もある。カマドは東壁中央南寄りに位置する。構造は2ないし3個の石を芯とした粘土カマドで、奥壁際に支柱石がある。南袖際の床面レベルからすると、カマド内部はほとんど掘り窪められておらず、この支柱石はかなり高い位置にある。内部に見られる焼土はブロック状となったもので、使用による被熱されたままの均一層とはなっていない。尚、カマド外側には攪乱がある為、断面図より煙道を復元している（カマド拡大平面図）。また柱穴は全く検出できなかった。

遺物は多く、南半部の覆土上層から床面までに目立っている。これらは土師器の甕と、内黒碗が多く、他には須恵器の杯・蓋、土師器の杯・皿・鉢などである。これらの遺物から本址の時期は平安時代中期、9世紀後半頃と考える。

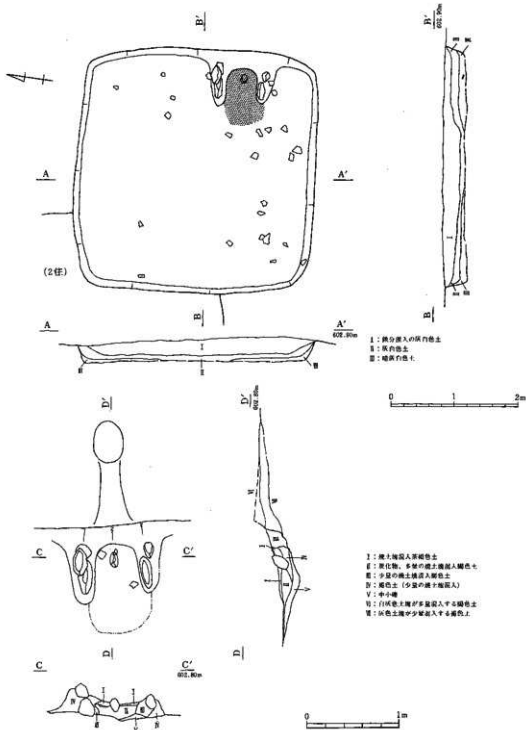
第2号住居址

南東部は1号住居址と重複している。また、北西隅と西壁の一部に新しいピットが本址を小さく破壊している。主軸はN-77°-Eを指し、規模は東西4.30m、南北4.50m、プランは胴張り方形を呈する。

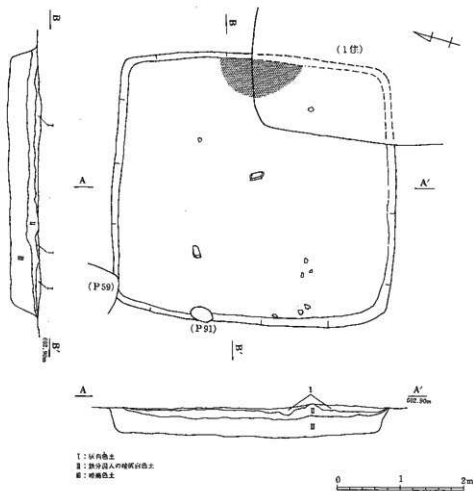
検出面は1号住居址と同様に茶褐色土であるが、覆土は1住の中心となった灰白色土は上部に僅か見えるのみで、I・II層間に鉄分が沈澱して固まり、かなり硬い。

壁高は検出面から40～50cmを測り、この深さの為、1号住居址との重複部分においても遺構の範囲をつかむことができた。床面は1住とほぼ同様で茶褐色土、その下は灰褐色砂利層となる。この為、床面と四方の壁下部は直径5cm大の礫が露出している。カマドは東壁中央に位置する。壁際床面上に直径1.3mの半円形状に焼上りが広がるが、他に施設らしきものは見当たらず、当初は粘土カマドであったと推測する。

遺物はごく少なく、覆土西半部を中心に総数20片程の土器片である。土師器甕・高杯・壺等で古墳時代末期、7世紀末の特色を見せている。



第7図 第1号住居址



第8図 第2号住居址

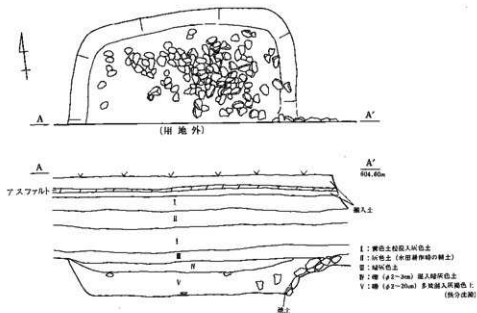
第3号住居址

第Ⅲ次調査区南西隅に検出した。南側は用地外となる為、遺構北半部のみしか調査できなかった。主軸はほぼN-93°-E、東西約3.7m 隅丸方形のプランを呈する。

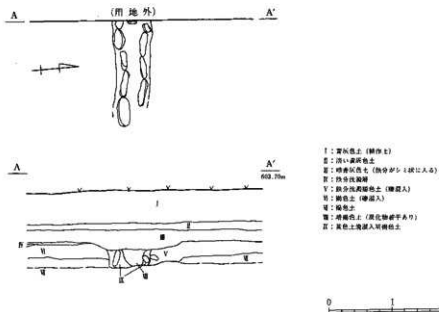
ここは検出面まで約130cmと深く、地表近くには道路舗装用のアスファルトが30cmの厚さの搬入土の中に一面敷かれた状態が残っていた。検出面は黄褐色土で直径1~5cm大の小礫を多量に混じえ、鉄分を沈澱させている。覆土は青灰色(上層)ないし灰褐色土(中・下層)で小礫を多く含み、下層になるほど礫が大きく、また混入度も密となるが、床面直上に達するとやや大粒の砂が出現し礫は減っている。

床は部分的に黄褐色を呈するが硬くはない。検出面から床面までは約60cmと深く、その傾斜は60度程と比較的緩やかである。カマドは用地隅にあり、かろうじて一部を探り得た。位置は東壁中央部にならうか。床面に焼土を残し徐々に高く東方へ伸びる一列の石組みがある。石組みは平石を立

第3号住居址



第4号住居址



第9図 第3・4号住居址

て、中央にはさし渡した平石が乗り、石組みカマドと煙道が原形のまま遺存していることがわかる。

遺物は覆土上層から散発的に出土するが、量少なく、床面近くになり大片が僅か見られる程度である。それらは土師器の杯・碗を主体とし、他に須恵器、灰陶陶器も混入する。これらを見ると、本址は平安時代、10世紀中頃と考える。

第4号住居址

第I次-B調査区に検出した石組みは住居址のカマド施設である。西側は用地外の為調査することができなかった。検出面は鉄分が多量に沈澱した褐色土ないし同様の礫混入褐色土である。

石はすべて花崗岩で最大直径50cm程、計9個の平石が立てた状態で2列に平行に並ぶ。これらの石は西に低く、東に高くなるよう埋められ、上部比高差は南列で40cmを測る。2列に並ぶ石組みの間はしまりの悪い暗褐色土で、中に少量の炭化物と焼土も僅かであるが見えている。このような状況からこれらの石は煙道部である。中央西端には支柱石が見えていることから焚き口はすぐこの西際となろう。石を据える為幅60cm前後の掘り方も見えるが、煙出しとなる東端は検出できなかった。尚、第3号住居址に同様の石組みカマドと煙道があるが、本カマドはそれより大形のものである。

本址に伴う遺物は皆無で、時期等は不明である。

2. 竪穴状遺構

第2号竪穴状遺構

第II次-A調査区の南際中央に位置する。東西3.1m、南北2.4m前後で不整な方形を呈する。南側には第1号土坑が本址を少し破壊して位置する。

覆土は焼土を少量含む灰白色土で、やや上層から見えている小ビットに近い土色である。床面は小・中礫が見え、少し起伏もある。壁高は検出面から5-10cmと低く、覆土の様子も考えると本址はかなり上部からの掘り込みの遺構である。南壁中央西寄りの床面上にはブロック状になった焼土があるが施設等は見られない。

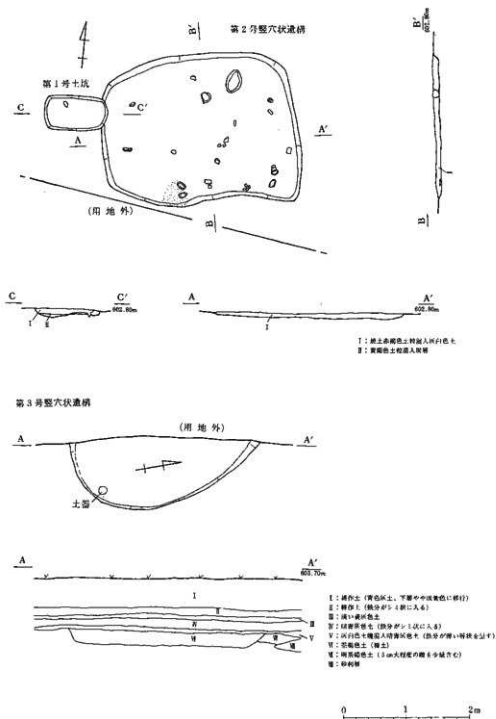
遺物ではないが、床面上にあるこぶし火-小兒頭大の花崗岩と砂岩は、被熱したものと熱により割れたものが多い。土器片は小片がごく僅かであり、時期は不詳である。

第3号竪穴状遺構

第II次-B調査区の南部に検出した。西側は用地外となり東側の一部を調査できたのみである。南北に長く直径3m以上の大形の楕円形になろうか。

検出面は現地表下80cmで、遺構は小礫を混入する明褐色土ないし灰褐色土中へ掘り込まれ、茶褐色土を覆土としていた。床面は平坦であるが硬さは見られない。壁高は20cm前後、壁の傾斜は場所により緩急がある。

土師器甕の大片が南東壁際覆土中より出土した。床面より約12cm程高いレベルであるが、この遺物を本址の時期と考えると古墳時代末期ないし、奈良時代に属するものなのであろうか。



第10図 竖穴状遺構、土坑

3. 土坑

第1号土坑

第II次-A調査区にあり、第2号竪穴状遺構と僅か重複する。東西に長い楕円形で規模は100×60cm。覆土は上・下2層をなし、下層には炭化材片が薄く層をなしている。この中には焼土と微量の骨片が見えていた。骨片は微量の為人骨かどうかは分からないが、東西に長い土坑であり墓址と考えるには妥当でない。尚、土色は竪2と同色で、底面は検出面から浅く最深部で13cm、竪穴状遺構同様に本来はもっと上部から掘り込まれたものである。

第2・3号土坑

2号は、第IV次調査区中央北端に検出した。検出面は茶褐色土層でここは地表から約1.2mの深さにあたる。検出面から30cmほど上部に粗い鉄分沈澱層、そして土坑上部には濃密な鉄分沈澱が見られる。平面形状は図の如くで、2個の土坑が集まったような形をなし規模は東西2.5m以上になる。土坑断面で見ると、底面に起伏がありブロック状をなす焼土が点在する。また3号は同調査区南西隅に位置し、検出面と焼土の様子も2号と同じ状況である。両者とも用地外にかかる為、全体形はわからず、また遺物も周囲の検出面と同程度の量、小片のみで提示も不可能である。

4. ビット

第II次-A調査区で42個、同B調査区で3個、第IV次調査区で36個を調査した。これらの多くは円形で直径20～40cmと小形である(例P₇₂～P₇₄)。これらの覆土は鉄分を少量沈澱させた灰色土で他にやや砂質の灰白色土、そしてP₇₂のような複層をなすものが少しある。II次・IV次調査ではビットはかなり高いレベル(浅い所)で確認できるものが多かったが、更に一律に15cm程下げ、遺構を検出した。その為これらの深さも検出面から10～20cm程のものが多し。

これらよりやや大形のものがP₈₈～P₉₀である。平面形は方形(P₈₈)ないし隅丸方形(P₈₉)を呈し、P₉₀の断面では深い2段底を見せている。これらはそれぞれ掘立柱建物址の一部ではないかと思われる。

尚、ここより南東100mに位置する、第I次調査地では奈良時代末期～平安時代初期と思われる1軒を含め計4軒の掘立柱建物址を調査している。

5. 溝

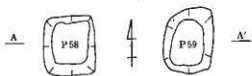
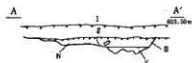
第IV次調査区に一本を検出した。検出面は茶褐色土層で、砂質の灰色土を覆上としている。溝は南から来て直角に曲がり東へ向かい16m程で消滅する。トレンチによる断面観察では深さ7～12cmと浅い皿状をなし、人為的な掘り込みとは思えない。

緩やかな自然地形の上を流れた自然流路であろうと推測する。

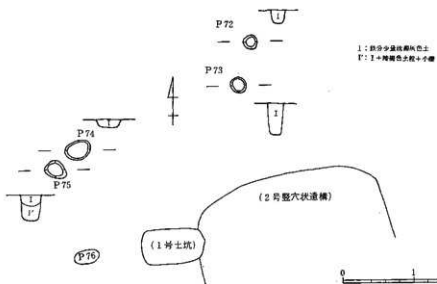
第2号土坑



- I: 赤褐色土
- II: 砂質灰土 (粘土混入あり)
- III: 粘土混入砂質灰土
- IV: 灰土
- V: 粘土塊・赤化塊混入灰土



- I: 粘土混入の褐色灰土
- II: 粘土混入の砂褐色土
- III: 灰褐色土
- IV: 暗褐色土



- I: 粘土少量混入褐色土
- II: I+暗褐色土較+小礫

第11図 土坑、ピット

< 3 遺物 >

1 土器・陶器

今回の調査では、遺構内・外から良好な資料を得ている。ここでは住居址等から出土した44点を図化・提示した。種別は、弥生土器・土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器と多岐にわたる。以下、各遺構・検出面から出土した土器について、器種・器形の特徴とそれらの年代観について既観する。なお、本文中で使用する器種・器形の分類、編年観は文献1によった。

(1) 各遺構出土の土器群

第1号住居址

17点図化した。食膳具は須恵器、黒色土器Aに限られている。須恵器は杯A(3・4)と杯B(5)がある。すべて底部に回転糸切り痕がみられる。黒色土器Aは、杯A(8・9・10・16)、皿B(7)が出土している。土師器は甕A(13・14・15・16)と小形甕D(12)が出土しているが、16は他より古い様相を呈しており、混入品と考えられる。土器群として捉えてみると、須恵器は杯の口縁が開くものが目立ち、土師器は黒色土器Aの杯A・皿Bが伴っている。これらのことから、本址の時期は果センター編年の7期に比定されるものと考えられる。

第2号住居址

全体に出土量は少ない。図化できたのは18~20の3点のみである。20は土師器壺の底部である。内・外面にミガキが施され、底裏には木葉の圧痕が残る。18は土師器甕の口縁部である。内・外面ともに強いヨコナデが施されている。19は土師器の甕の胴部である。粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る。外面は、雑なハケメが施された後に板状工具でナデ調整され、内面は雑なナデ調整が施されている。本址の時期は、出土遺物が少なく判然としないが7世紀の後半~末と考えられる。

第3号住居址

11点図示している。黒色土器Aの杯A・椀A、土師器の杯A・椀、灰釉陶器の椀、須恵器の短頸壺で構成される。21の黒色土器A椀は、底部にヘラ記号がある。30の灰釉陶器椀は、高台部が細長く外側下半に稜を有し内側下半が内彎する。本土器群の時期は、食器類の様相から7~8期くらいを想定したい。

第3号竪穴状遺構

出土量が少なく、わずかに1点しか図示できなかった。32は甕Bの底部である。器壁が厚く、外面は細かく短いハケメが施されている。底部には、木葉圧痕が残る。本址の時期は、出土遺物が少なく判然としない。

(2) 検出面出土土器

弥生土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・古瀬戸系陶器などが出土している。36は緑釉陶器の輪花椀である。底裏以外の内・外面に施釉されている。輪花の手法は、口縁端部から体部までヘラで

押え込み、外面に粘土帯を貼り付けている。38は、古瀬戸系陶器の鈿皿である。39は、弥生中期後半の甕の破片である。

参考文献

- 1) 小平和夫 1990 『第3章 第5節 古代の土器』『中央自動車道長野緑地文化財発掘調査報告書』
長野県埋蔵文化財センター

2. 瓦塔

瓦塔は屋蓋の破片が3点出土している。いずれも胎土には石英・砂粒を含んでおり、焼成は軟質である。土師質にみえるが還元焼成による須恵質の焼物である。成形はへら状工具を用い、調整はへら状工具、指ナデによって行われている。1は軒先の破片である。色調は上面では暗灰色、裏面では暗灰色・褐色を呈し、内部は灰色である。上面には半截竹管工具を用いて、間隔をあけずに丸瓦のみを表現している。丸瓦の高さは0.4cm、幅は0.9cm程を測り、継目は小破片の為に総数は不明であるが、軒先の近くに1つ認められる。この継目は、大きな段になっており、いわゆる行基書きを表現している。軒先は平坦な面で、軒丸瓦の瓦当面等は見えない。一方下面には粘土板を貼りつけて地垂木を作り出している。地垂木は高さ0.4cm、幅は1.0cmである。間隔が広く、上面の丸瓦とは対応しない。2は天井部の破片である。色調は上下面ともに褐色を呈し、内部も同色である。天井部は11.6cm程の方形を呈するものと考えられ、中央には心柱を通す直径5.6cmの円孔が開けられている。上面には天井部外縁より1cm程内側に幅0.8~1.5cmの刺雑痕が認められ、地覆が接合されていたと考えられる。この内側に最上層ならば露盤、それ以外なら軸部がのせられることになるが、地覆と円孔部の間隔が軸部をのせるには狭く、おそらく露盤がのせられていたと思われる。下面には円孔の縁から延びる疎らな地垂木が表現され、断面は三角形に近い。3は形状・大きさから見て棟の先端部と考えたい。色調は赤褐~黒褐色を呈し、内部も同様である。4は最上層の復元模式図である。屋蓋全体の大きさは推定できず、明らかでない。1・2・3はいずれも第1号住居址(9世紀後半)からの出土で、胎土・調整等から同一個体と考えられる。瓦塔の出土した遺跡としては、松本市内で鎌ヶ崎の城山越遺跡、島立の島立北栗遺跡⁽¹⁾に続いて3例目、長野県内では14例目である⁽²⁾。伴出した遺物から所属する年代が推定されたものは少なく、貴重な例となった。本遺跡のある島立地区には古代の寺院址は確認・推定されていないが、瓦塔以外にも仏教に関係があるとおもわれる仏像⁽³⁾・銅鏡⁽⁴⁾等が出土しており、当地での仏教文化の浸透を示すものであろう。尚、瓦塔に関しては八賀 晋(三重大学教授)、森 郁夫(京都国立博物館考古室長)、小林康男(塩尻市立平出遺跡考古博物館館長)の各先生に御指導を賜った。記して感謝申し上げたい。

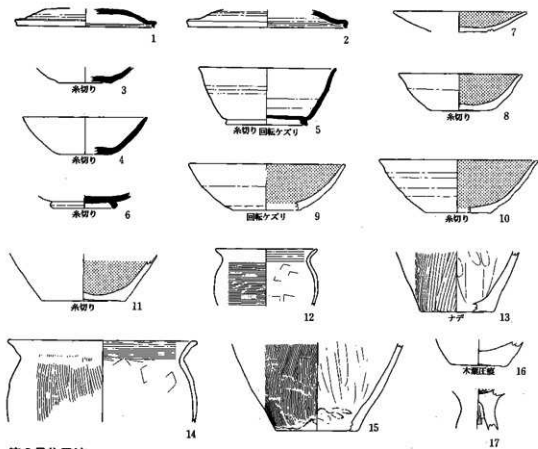
注

- (1) 長野県教育委員会 1990 『中央自動車道長野緑地 埋蔵文化財発掘調査報告書 8』 P224 参照
(2) 桐原 健 1992 『信濃の国の仏教文化』『古代家国の仏教文化を探る』塩尻市立博物館 P7 参照
(3) 松本市教育委員会 1988 『松本市島立三の宮遺跡』 P86 参照
(4) 松本市教育委員会 1984 『松本市島立南栗遺跡』 P122 参照

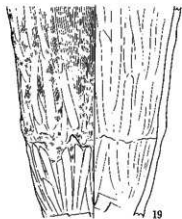
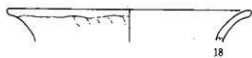
参考文献

- 林 和男 1985 『信濃の瓦塔』『信濃』 37-4
塩尻市教育委員会 1991 『高橋沢遺跡』

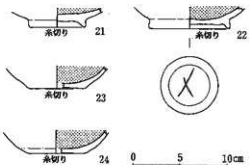
第1号住居址



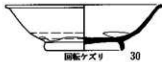
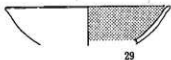
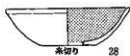
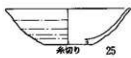
第2号住居址



第3号住居址



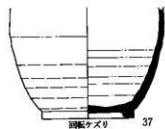
第12図 出土土器実測図(1)



第3号整穴状遺構

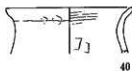


II次 A調査区



0 5cm

II次 B調査区



III次 検出面



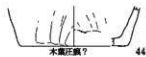
IV次 第1検出面



IV次 第2検出面

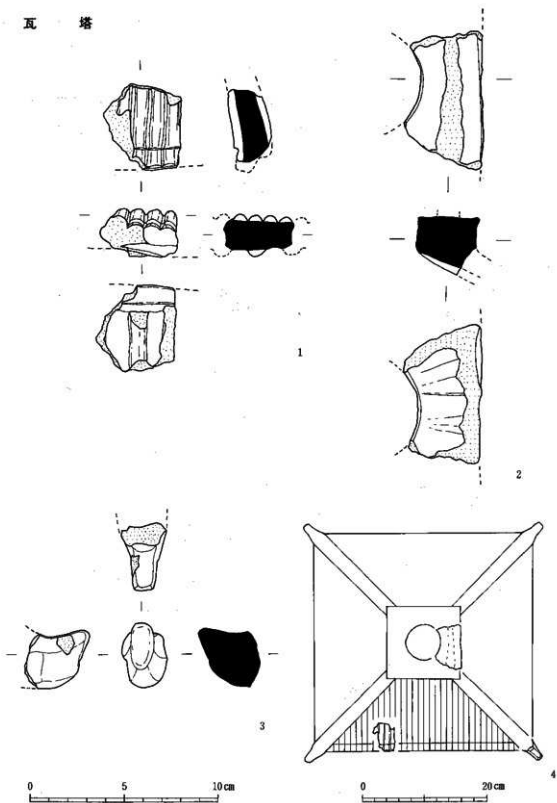


0 5 10cm



第13図 出土土器実測図(2)

瓦 塔



第14图 出土土器实测图(3)瓦塔

IV まとめ

今回の調査地は、現在では全て高綱中学校敷地となっている。この場所は鳥立・和田・新村地区の真ん中に当たり、昭和28年この旧三ヶ村が組合立中学として建てたのが学校の始まりである。昭和37年プール建設の際に焼土と遺物が出土し、この時より高綱中学校遺跡として登録されている。

近辺の調査では、この東一帯に広がる「鳥立条里遺構」に当市教育委員会が総延長1.5km余にわたるトレンチを東西、南北に入れ調査を行なった。この時には平安時代中期を中心に平安時代後期、そして古墳時代後期の住居址や、土坑・ピットなどを計126ヶ所の地点を確認し、生産地域とされた条里的遺構の下に古墳時代から平安時代後期までの集落があることをうかがわせた。これに関しては、果狸蔵文化財センターによる発掘でも水田・畔・水路などを調査し、更に花粉分析などの科学的調査などを加え、条里的遺構の基本的な設計は13～14世紀頃と論じている。また当市が調査した、高綱中学校第1次調査は掘立柱建物址4軒、竪穴状遺構等を検出し、このうちの大形の建物址からは奈良時代末～平安時代初期の遺物を得ている。

これらの結果と今回の成果とを合わせ見ると、住居址4軒のうち2軒は平安時代中期、1軒は古墳時代末期で、検出面などより得られた遺物もほとんどが近辺調査の遺構時期の範疇に含まれていることが分かる。ただ、遺物では2、3点注目したいものがある。まず、弥生時代の甕である。弥生時代では終末期の集落を1.5km北東の三ノ宮遺跡に見ることができる。又、この近くでは南栗に1軒後期の住居址が発見されているだけで、この時期については空白とも言えるが、この遺物で本遺跡近くに該期の遺構の存在を予測させる。瓦塔については前の項目で触れているが、松本市内ではこれが3例目の出土となる。奇しくもこのうち一例はすぐ東の北栗遺跡からの2点の出土でここでは泥塔の出土も見ている。古代の仏教の施設・伝播と、この土地とどのような関わりをもつものであろうか。

尚、前述のプール建設の際に出土した仏像が南栗の正行寺に保管されていると聞いたので、実見させて頂いた。この寺は後に了智上人となった佐々木高綱を開基とする。仏像は木像の邪鬼1点で、高さ約25cm、幅・厚さ約30cmで上下に平坦な面をもっている。四天王の脚下にみられるようなものであるが、土中に長い間埋もれていたものとは思えない程、腐食もなく表面下も光沢がある。今回出土した唯一点の13世紀代の古瀬戸おろし皿など中世遺物と佐々木高綱にまつわる寺の関係はどのようなものであったのだろう。

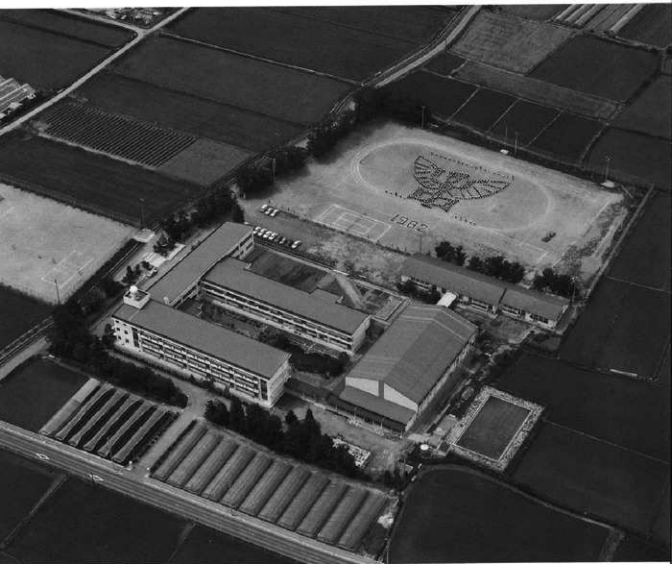
遺構の偏在を見ると、II次-B調査区北半部は地山である梓川氾濫原堆積物の砂・礫層が地表から浅い所まで残って（高まって）おり、ここには遺構、遺物が全く見られない。小字名である「高綱」はここを含め南北へ広がり、その範囲は東西100～300m、南北約600mと他の小字名を残す地区より際立って広い場所である。以前は「高砂」とも言われていたらしく、これはこの地質からきた

呼び名とも思える。尚、今回の他の調査地は厳密にはⅡ次-A調査区、Ⅳ次調査区が「汐添」、Ⅲ次調査区は「高綱」、又、先のⅠ次調査区は「立石」に当てはまる。

新村・島立地区は近年大規模なほ場整備事業や、道路整備事業が行われ、この周辺に限っても昭和58年度から昭和63年度にわたる本市教育委員会の調査、さらに昭和61・62年度の県埋蔵文化財センターによる調査等が続き、貧弱な縄文時代、そして弥生時代、遺跡の中心をなす古墳時代末期から、奈良・平安時代、更にこれに続く中世の遺構群等が次々発見されそして膨大な出土遺物があった。これらにより総合的な歴史検証の資料が整いつつあり、今回の成果は比較的乏しいながらも今迄の資料を補いつつ、又、新しい知見を導き出すものとなろう。

参考文献

- | | | | |
|-----------|------|---------------------------------|---------|
| 宮下義信 他 | 1973 | 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻上 | 郷土資料編纂会 |
| 樋口昇一 他 | 1986 | 『国説 松本の歴史』上巻 | 郷土出版社 |
| 記念事業推進委員会 | 1992 | 『高綱中学校四十年誌』 | 刊行委員会 |
| 松本市教育委員会 | 1983 | 『松本市新村秋葉原遺跡』 | |
| " | 1985 | 『松本市島立南栗・北栗遺跡 高綱中学校遺跡、朱里的遺構』 | |
| 長野県教育委員会 | 1990 | 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』 | |
| " | " | 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書6 三の宮遺跡』 | |
| " | " | 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書7 南栗遺跡』 | |
| " | " | 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書8 北栗遺跡』 | |



松本市立高綱中学校 昭和57年6月10日 撮影



第2地点層序



第5地点層序



第1・2号住居址掘り下げ中(東より)

第2図版 遺構



第3号住居址（北より）



同・遺物等出土状況（西より）



同・カマド施設



Ⅱ次一A調査区南半部
(東より)



2号竪穴状遺構
(西より)



1号土坑
(南より)



Ⅱ次-B調査区
(北より)



Ⅱ次-B調査区、検出中
(南より)



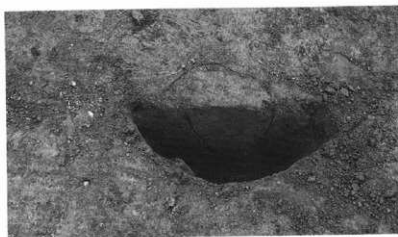
Ⅳ次調査区全景
(西より)



第2号土坑
(南より)



第3号土坑
(北より)



Ⅳ次調査のピット



Ⅱ次調査風景



皆さん発掘は初体験



社会科の体験学習
御苦労様でした。

第7図版 調査風景



Ⅲ次調査風景



Ⅳ次調査風景



更に掘り下げる
(Ⅳ次調査)



3



4



5



7



8



9



10



20



21



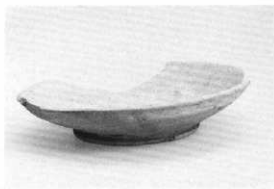
25



26



30



35



36



37



38



2



1



2



1



1



3



3

第11圖版 瓦塔

松本市文化財調査報告 No.110

松本市高綱中学校遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

平成5年3月22日 印刷

平成5年3月22日 発行

編集 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3-7

TEL 0263 (34) 3 0 0 0

発行 松本市教育委員会

印刷 精美堂印刷株式会社
